

関川流域委員会 川のワークショップ 記 録

平成18年8月26日(土)

於:上越テクノスクール

参加者 : 市民 15 名 流域委員会(7名) 事務局 3名

内 容

0. ワークショップの日程と論点	1
1. ワークショップの趣旨、内容紹介	2
2. グループ討議: 第1セッション ー議論ー	3
3. 第1セッションの議論の報告と意見交換	12
4. グループ討議: 第2セッション ー議論ー	16
5. 第2セッションの議論の報告と意見交換	26
6. 全体のとりまとめ	30

0. ワークショップの日程と論点（小池委員長メモより）

～安全で親しみのもてる関川、保倉川を目指して～

■ 日程

10:00	全体討議:ワークショップの趣旨、内容紹介
10:30	グループ討議:第1セッション - 議論 -
11:30	グループ討議:第1セッションのとりまとめ
12:00	昼食
13:00	全体討議:第1セッションの議論の報告と意見交換
13:30	グループ討議:第2セッション - 議論 -
14:30	グループ討議:第2セッションのとりまとめ
15:00	全体討議:第2セッションの議論の報告と意見交換
15:30	全体討議:全体の取りまとめ
16:00	終了

■ 論点

1. 第1セッション:関川・保倉川の印象と私たちの川づくり
上中流(保坂、横田、梅澤)、下流(小林、岡森)の各グループ討議
 - (1) 心に残る風景やできごと
 - (2) 今と昔(川の姿、川との付き合い方、昔は...だったが、今は...)
 - (3) 好きなところと困った問題
 - (4) 私たちにできること、やりたいこと
 - (5) 上中流/下流へのお願い、提案
2. 第2セッション:関川・保倉川の洪水対策と環境保全
洪水対策(保坂、岡森、梅澤)、環境保全(小林、横田)の各グループ討議
 - (1) 問題点の洗い出しと重要度
 - (2) なぜそのような問題が生じるようになったのか
 - (3) これからの社会や技術の見通し(財政制約、人口減少など)
 - (4) 望ましい姿
 - (5) 私たちにできること、行政に期待すること

1. ワークショップの趣旨、内容紹介

(小池委員長より)

- ・ 流域委員会の設立目的とこれまでの活動について説明
- ・ ワークショップのスケジュール説明
- ・ 資料についての説明（中間とりまとめパンフレット、資料1～4）

流域のみなさんのご意見を河川整備に活かすために、アンケート・車座意見交換会、川の見学会を行ってきた。ワークショップでの意見交換を通じて、安全で親しみのもてる関川・保倉川の川づくりの方向性を得ていきたい。



2. グループ討議:第1セッション ー 議論ー

■ 上中流グループ

□ メンバー

Aさん	: 妙高市小石川(旧新井市)	
Bさん	: 上越市板倉区針	
Cさん	: 上越市本町	
Dさん	: 妙高市杉野沢(旧妙高高原町)	
Eさん	: 妙高市高柳(旧新井市)	
Eさん	: 妙高市高柳(旧新井市)	小学4年生
Fさん	: 上越市子安新田	
Gさん	: 上越市安塚区小黒	
横田委員	: 上越市下馬場	
保坂委員	: 上越市三田	ファシリテーター
三阪氏	: 東京大学	オブザーバー

保坂委員：今と昔、心に残ること、特徴など、自己紹介を含めてお願いします。

横田委員：心に残る風景。下馬場に住む。山間に近いところ。子供の頃遊んだ。小学校5年生のころプールができるまでは川で泳いだり魚をとって遊んだ。プールができからは泳がなくなった。学校から泳いではいけないといわれた。委員になったのは上越環境科学センターに勤めて分析を行っているため。よく言われるのは、濁っているから汚いということだが、そうではない。逆に、見た目が澄んでいるから安全とは言い切れない、ということをお話している。洪水に遭ったことはないが、今回、下流の方のご苦労を聞くようになって身に迫る思いである。

Aさん：月岡に近い小石川に住んでいる。何十年に1回は水害に遭ってきた。子供の頃は水遊びも何をするのも関川だった。小学生の頃、河川敷があって、子供会で畑にスイカやカボチャを作って食べた。7.11後の河川改修後、板倉で立ち上げた改修促進同盟の理事長となって以来、支川についても関心を持っている。

Bさん：板倉区針から来た。関川からは離れていてあまり関心はなかったが、用水は関係してくる。中江用水と桑江用水が通っていて、プールが無かった子供の頃、泳いだ。下流のはけ、用地が直っていないのでどうしても水害がなくなる。勉強しながらやっていると難しい。

Cさん：本町4丁目、高田の中心市街地からきた。関川から離れていて、正直、どうして自分のところが呼ばれたのかという気持ちである。近くに儀明川が流れていて、排雪に使われている。子供の頃は関川で遊んだり魚を捕ったが昔のことで、何と答えてよいかわからない。

Dさん：関川の上流部の杉野沢、これより上に民家がないところに住んでいる。通勤で直江津まで通っていて、40年くらい川を見ている。中学生のころイワナ釣りで川に親しんだ。水害で護岸が崩れて工事したが、以前ならコンクリートで固めるだけだったが、少しは良くなってきた。ただ、まっすぐなので、これでは水が一気に下まで行ってしまうと思う。蛇行したりすればゆっくりになると思う。護岸の木などが生物には大切だが、それがない。矢代川に全く水がながれていなく、川と呼べる状態ではない。最低でもある程度の水が流れるようにしないとイケない。

Eさん：高柳に住む。月岡防災ステーションの少し上流、関川本流から200mくらい。出身は神奈川県で昔の関川のことは知らない。今は子供と自転車で川べりを走ることもある。子供が通う中央小学校が川の目の前にあって、川に近い生活をしている。子供の頃は相模原にいて川は近くになく遠い存在だった。川で遊ぶことは無く、近づいてはいけないという存在だった。こちらに来てから、関川、矢代川などいろんな川があるなあという実感である。好きな風景でいうと、小学校沿いの新しい道路から眺める風景が気に入っている。矢代川は春はすごい水なのに夏に全くなくなるのが不思議だった。山の方に万内川砂防公園があり、夏の間、何度か子供を遊ばせる。自分が子供の頃とくらべると、うらやましい感じがする。

Fさん：中央病院のすぐそばに住んでいる。漁業協同組合の事務局長をしている。水系は上越から妙高までを管理対象としてすべて網羅する。生まれは吉川で成人してから

は高田で、心に残るといえば、昭和 45 年くらいまでは中央橋上流でアユつりが盛んだった。今はまったくなくなっている。漁協の立場としては、水の中のことが一番の関心事で、今日は困っていることを聞いていただきたい。

G さん : 旧安塚町小黒から来た。保倉川支流の朴ノ木川沿いにあたる。昭和 20 年代後半の生まれでそのころはアユがいた。小学校くらいまでは水がきれいだった。フルチンで川で泳ぎ魚を捕まえた。集落で泳ぐ場所を決め、監視をつけて泳いでいた。小学生以後、河川工事が増えて水が濁ってきた。最近荒廃地が増えて地すべりが増え、土砂が流れ込むようになってきた。小黒川を含めて頸城野平野をうるおす水源だが、地すべり地域に指定されているところで、少子高齢化できれいな山の管理が難しい。もう 10 年もすると棚田がなくなってしまうのではないかと思う。下流の土砂をさらうよりも上流の土砂流出を食い止めるほうが経済的ではないかと思う。融雪期には川の水が灰色になるが、ただ、濁っていてもきれいだときいて少し安心した。排水を下流に流さないように取り組んでいるが、年寄りが多くて難しい。

保坂委員:好きなところ、困った問題についてはいかがでしょうか。

F さん : 7.11 水害は近年にない災害だったが、その復旧が問題である。治水を最優先し生活環境の安全性を重視したが、自然を損ない人工的になりすぎた。蛇行して流れるところが無くなった。治水のため、早く流すという考えであり、それにより環境、生物にとっての場所が損なわれた。

G さん : 少しは自然的になって昔に比べれば格段に良くなった。護岸は気に入らないが。

F さん : 上流から県境は大きな石があってよいが、中流から下流は石がない。

G さん : 趣味で釣りをしているが、放流されているイワナが従来と違う種類で、外人を釣っているみたいである。

F さん : 漁協として放流する種類は全国で地域により 4 種類くらいに決めている。ここでは魚沼漁協が育てているヤマトイワナを放流している。今は原種はいないが、交配種はいないはずだ。

G さん : 現状の 2 倍、3 倍の金を払っても良いのでイツキノイワナを放して欲しい。

F さん : 原種ということになると無理だと思う。イワナ、ヤマメなど現在放流しているのも外来種ではないのだが。

横田委員:種類が変わったのは改修のせいかな

F さん : 改修の為ではない。困った問題として、月岡頭首工のそばに新井地区の排水が 4 ヶ所、集中的に出てくる。透明度や水質の点では問題ないのかもしれないが、においがすごい。においには基準がない。分散していれば拡散し、中和できるが、集中しているためそれができない。特に渇水期にひどい。魚も臭くなってしまふ。昭和 45 年頃、アユはスイカの匂いがしたが、今は違う。川の水は汚染されているのではないか。もっと距離を離れたらよいのだが。

横田委員:昭和 45 年くらいまでは排水処理施設がなかった。昔の水量はどうだったか。

F さん : 水量は昔はもっとあったと思う。船で物資を運搬できたのだから。雨量は変わら

ないとすれば、保水力が落ちたということではないか。

Aさん : 用水の作り方も変わった。

Fさん : 減反が3割なら、3割の水はいらないはずで、使い方を考えればなんとかなるはずだ。法律では維持用水として流さなくてはいけないはずだが、そうっていない。水を節約して水を取り戻さなくてはいけない。

Aさん : 上流で水銀が出るが、魚を食料にするために何とかできないか。

横田委員 : 食べてはいけない魚種、地域はだんだん少なくなっており、改善される方向にはある。

Fさん : 検査体制を強化しないといけない。下流で調べるだけで現地での調査をやっていない。水銀は重いので、砂防ダムのようにして早めに沈めてしまう方法もあると思う。

Aさん : 頭首工を見ると、以前は曲がった魚が見られたが今は見ない。改善されているのだと思う。

Fさん : 企業排水の改善、農薬の減少などのためだろう。

保坂委員: 私たちにできること、上中流から下流に対してやって欲しいことなど

Gさん : 行政職員なのでその立場で言うと、荒廃農地をなくしていきたい。治山もできるだけ、国有林なので補助をいただいてやっていきたい。川についても補助をもらって草刈などを行い浸食防止に努めたい。保倉川は河川だが、小黒川は砂防河川のため河川法の対象にならない。一体的な体系のもとで整備できるようにして欲しい。大瀧用水でアユ、イワナ、ウナギなどが上ってこれない。石の間に土砂が詰まり棲めない。上ってこれるように一気に段差をつけず段々にできればと思う。

横田委員 : 川がまっすぐになると、生き物が棲むところできないというが、水をすぐ流したい、蛇行させるとコストがかかるし管理も大変になるといった意見が多い。

Gさん : 地元では、蛇行のほうが流速が弱まるし淀みもできて良いという考えだ。国も自然に優しい工法に力を入れつつある。動植物を調査して適切に整備していきたい。

Aさん : 関川は良いが、別所川など支流はそうっていない。針、小黒川など蛇行や自然は災害の危険性を増やすのでその辺も考慮しながら整備すべきだ。バランスが重要である。

Fさん : 治水と環境のバランスが重要である。全体的には環境に重点を置いた方が良さそうだが、地域ごとに異なってくる。治水だけだとまっすぐにされてしまうが、山間部なら一気に下に流れてしまうこともあるので曲げても大丈夫ならば、ということもあるので、これらを考慮して地域ごとに考えていく必要がある。

Aさん : バランスが必要だが、下流はまず、治水をきっちりしておかないといけない。

Gさん : 下流は河川の断面積も必要である。

Dさん : 矢代川の水がないのが一番の問題である。あれでは川ではない。最低限の水を流して欲しい。

横田委員 : 上四ツ屋の方もそう仰っていたが、そういう人たちも田んぼをやっている、な

かなか解決できない問題である。

Fさん：解決できると思う。発電所があるのだから、それだけの水はあるということ。現状は、まず、企業が取る、次に田んぼが取る、それから市が取り、渋江川に流している。渋江川にまわすその半分でも矢代川に残せばできるはずである。企業、住民、関係者の間で話し合いが必要である。

保坂委員：住民が考えないと、という結論でした。地域にあわせた整備をすべき、など、良い意見がたくさんありました。最後に、言い足りないこと、住民としてできることをお話してください。

Bさん：農業用水は用水事務所の管轄だ。用水費を払っているので使わなくても取水しているのであろう。また、防災のためといった理由もある。

Fさん：用水の工法にも問題がある。

Aさん：工業用水はどうだろうか。

Fさん：まずはひとつのテーブルにつくことだ。個人としてできることとしては、一人ひとりが節水することがまずはじめだろう。

Eさん：魚がいればいい、水が澄んでいればいい、というわけではないことを知った。こういうことを普通の人は知らないのが現状である。知らないことは罪である、というのは言い過ぎかもしれないが、そこに問題がある。みんなに知らせていくことが大切だ。ある小学校で川について勉強し、1年かけて、川に水を取り戻すには自分たちが節水しなくてはいけないと考えるようになった、ということを知ったことがある。

Gさん：国土交通省のボランティアが4~5年前にあったが、最近は聞かない。そういった活動の中で知らせていくことも重要だ。それが関心を持つきっかけとなる。小さなゴミを拾うことから始めていく。

Dさん：水を大切、有効に使うこともわかるが、もっと上流で、どのように涵養するかも知らなくてはいけない。そこまで考えないと解決しない。

保坂委員：8/19の見学会で、安塚の八木さんという方から、上流は高齢化が進んで棚田などの維持管理が難しく、下流の方に知ってもらい力を貸りたいという話があった。

Dさん：近くで生活する人もいるので言いにくいのだが、例えばゴルフ場。あれは雨でもプレーできるように、すぐに排水するようにしている。スキー場も同じである。これらは保水力がなく、一気に下流に水を流している。

横田委員：行政でできることとしては、どんなことがあるのでしょうか。

Gさん：森林交付金で調査、整備を行っている。水田は直接支払い制度を利用して維持している。有効な土地をできるだけ確保したい。できれば、下流から草刈ボランティアなどを募り、収穫したら10kgくらい進呈するとか。棚田には排水路が無いので、どこかの田が耕作をやめると地すべりにつながってしまう。やめたあとは、植林か排水路をきちんとするようにして欲しい。

保坂委員：ありがとうございました。セッション1を終わります。

■ 下流グループ

□ メンバー

Hさん	: 上越市塩屋新田	
Iさん	: 上越市港町	
Jさん	: 上越市西本町3丁目	
Kさん	: 上越市西本町3丁目	
Lさん	: 上越市三田	
Mさん	: 上越市春日新田	
Nさん	: 上越市春日新田	
岡森委員	: 上越市下源入	
小林委員	: 上越市五智	ファシリテーター
小池委員長	: 東京大学	オブザーバー

小林委員：今と昔、心に残ること、特徴など、自己紹介を含めてお願いします。

小林委員：五智に住んでいる。平成 11 年、12 年に国土交通省のワークショップに参加し、東雲、塩屋新田、稲田の 3ヶ所の整備を検討した。そのときの有志で設立した NPO 法人「関川水辺クラブ」の理事長をしている。水辺クラブで、昨日から明日まで専門家を交えて高土町の埋没林の調査をしている。個人的に川に行っている中で、河原で狢犬の欠けた頭を発見した。川の歴史に関わりながら関川のことを考えていきたい。また、みなさんと情報交換をしていければと思う。

Hさん：このすぐ近くに住んでいる。子供の頃の風景といえば、桜と、川沿いのゴミ。水害や洪水のときには死体や木（これは集めて燃料にした）などいろいろなものが流れてきた。死体が岸にとどまるとその自治会で葬らなければならないので、海に流れていくようについたりしたものだ。埋没林には興味がある。

Iさん：港町に住んでいる。子供の頃の思い出としては、直江津港がまだ未整備のころ、大きな船(てんま舟)の石炭を積み替えて河原町に運ぶはしけが記憶に残っている。

Jさん：子供の頃は荒川町に住んでいた。現在は西本町。物を洗うのもゴミを流すのも川で、川がなければ生活できないような感じだった。海だけでなく川でもハゼつりやフナつりをした。川の水は澄んでいて、底まで見えていた。魚の姿も見えた。今はそれは望めない。自分自身も、川に行こうという気がなくなった。

小林委員：昔の川はもっと砂利があったのではないか（砂利や川砂など）。淵と瀬が必ずあった。

Kさん：4歳の時、九州の天草から母の実家のある直江津にきて、小さな島に小さな川が流れていた天草と違って、川が大きいのにびっくりした。「大川へ持って行って流すぞ！」とじいちゃんやばあちゃんに言われた怖い記憶がある。でも、芸術品のような川。今は川の写真を撮っている。海岸に流れ着く胡桃を採取している。流木も芸術品である。直江津は海運の拠点で、恵みが多く危険が少なくなるようにしたい。見学会では、田んぼがコンピューターで管理されているのに驚いた。

Lさん：戸野目川のあるところに住んでいる。水はコーヒー色で背丈より高く草が茂っていて、川には近づけなかった。自分たちが住んでいるところは対岸より少し高いらしく、水はあがらない。NPOの調査に関わって、埋没林を見て感動した。

Mさん：春日新田に住んでいる。洪水常襲地帯に住んでおり、川に関心を持たざるを得ない。以前のワークショップにも参加した。NPOの勉強会、アンケート、不法係留プレジャーボートの議論など関係ある行事には参加して勉強している。川といえば洪水だが、昔は関川で泳いでいた。戸野目川にも入った。乾くと白くなって粉をふいたが汚いとは思わなかった。コイやフナを取ったり、鉄橋から飛び込んだり、川を怖いとは思わなかった。遊び場だった。

Nさん：終戦前後、小学校低学年から中学年の頃まで、団体（班）で川や海へ泳ぎに行った。終戦後はよく洪水があったが、昔からの部落は水につからなかった（田んぼはつかったが）。洪水のとき「馬だらい」に乗って遊んだ記憶がある。川に悩まされたところ。水利用の関係では、祖父が田んぼの係で、取水堰を払い水の流れ

を変えていた。洪水のときには祖父が一人で堰払い（堰を外しに行く）に行くので、祖母が心配していたのを憶えている。終戦後かなり遅くまで砂利船があって、ひいじいさんの代まで船で砂利を採取し収入を得ていた。また、関川に架かる木造の橋には大きな穴がいくつも開いていた。雪が欄干と同じ高さまで積もり、その上を歩いたが、滑るので怖かった。

岡森委員：戸野目川のすぐウラに住んでいて、自分の庭のようなところだった。関川にはあまり行かず、もっぱら戸野目川で水遊びをしていた。濁っていたが気にせず泳いで遊んでいた。欄干から飛び込んだり、対岸の畑からスイカを頂戴して食べたりしていた。関川の別名は普通は「荒川」だが、「大川」とも呼ばれることを流域委員会で初めて知った。先人たちは洪水がおきても水が来ないところに部落を作っていたことに感心する。今は昔とは大きく変わり、下流から上流に水が流れ内水害がおこるところもある。地域開発で田んぼを埋め尽くしてしまっており、内水問題が深刻する危険性を感じている。毎日のように上・下源入に家が建てられているが、そのうち必ず水につかると思う。そういう川づくりをしていないからだ。昔の川ではなく、埋めてしまったために内水害が発生している。

小林委員：では、好きなところ、困った問題について、付箋紙に書いてください。

Nさん：終末処理場から排出される下水処理水に、人が飲んだ薬の残留物などが混ざっている。影響はわからないが、問題があるのではないかと思う。処理場で汚れはとれるが、化学物質はとれない。稲田の生活排水も問題である。

Hさん：昔は堤外地に畑があったから、人が川に足を運び、川との関わりがあった。今はそういうことがなくなって、川との関わりが薄れているのでは。

Kさん：上流から川の砂が供給されないので、かつては100m近くあった砂浜が狭くなってきている。砂防ダムや浚渫の善悪を考えなくてはならない。直江津港の開発の影響も大きい。大潟では海岸の砂浜がなくなっている。

小池委員長：日本列島自体が小さくなってきている。どのように土砂を流しながら守っていくか考えなくてはいけない。黒部川では、海岸線を守るため、ダムからいかに土砂を出すか、スリットダム（平時は土砂を流し、洪水時は止める）で実験中である。同じような試みが天竜川でも始まるなど、いろいろな試みがされている。川の瀬と淵がはっきりしない、小砂利が減ってきているというのも、ダムなどが原因である。関川の場合は砂防ダムである。

（小池委員長：これまでのみなさんの意見をまとめると、下流から上中流に対する要望は）。

- 土砂を流す
- ある程度の水を流す
- 汚水処理
- 開発による農地のつぶしすぎを防ぐ（無理のない開発）
- 棚田と森林の保全

- 水質の保全是どうしたらいいのか。昭和 30 年代は利水優先だったため、全てに水利権が付いている。(農業用ダムなので) 笹ヶ峰ダムの水が妙高高原で飲料水に使えない。利権調整の必要がある。

岡森委員：水利権を握っているのは誰なのか？

小池委員長：明治時代、河川法制定時には、国はそれまでの慣行水利権を認めた。人々のそれまでの長い苦労があったからだ。昭和 39 年に許可水利権制となり、建設大臣（現在の国土交通大臣）が、洪水のときに水を貯めるダムを造ったところに対して水利権を認めるという形になった。慣行水利権を既得権として認めたままにせず、許可水利権に移行したことは、日本は世界的にも先行したと言われている。例えば中国では、今やろうとしてももうできない。生き物のために水をとっておくという考え方は今までなかった。河川維持用水という考え方は入ってきているが、生き物・環境の水利権というところまではいっていない。大井川では、電力会社が発電をやめ、水利権を放棄して水を流すようになっている。

Kさん：保倉川放水路反対の背景は？

Nさん：放水路によって町内が分割されるという意見もあるようだ。

小池委員長：個別のことは合意を得るのが難しい。共通のところから話し合いを持つこと、今回のような場をもつことがまず大事である。

小林委員：水は生活には絶対必要である。飲み水、用水など生活の裏づけの中にあるもの。もう少し大事にしていくという観点からいくと、下流から上流に望むことはたくさんある。

Nさん：水の使う量。

小池委員長：焼山から妙高にかけては、降った雨がゆっくりと浸透するので、普通の川よりも雨が降らなくても水が豊かである。だが、農業のために使っていて、矢代川では水がないという問題もある。

Jさん：祇園祭なくして直江津のまちづくりはない。水の多少で舟下りができないのは問題である。川底が浅くなっている。

小池委員長：水の多い少ないという話が出たが、水が多いときにできないというのは、これは昔からあることで仕方がない。少ないという場合には、雨が降らないという原因と、水を使いすぎるという2つの原因がある。「祇園祭がいつでもできる関川をつくらう」というのはひとつのキャッチフレーズとなる。行政に対して何を求めるかにもつながる。「レガッタ、舟下りができる川にします」とか。

小林委員：結局、いい生活をしていけば人は自然にやってくる。

Kさん：下水道のおかげで、天王川ではボラの大群がコケをはんでいる姿が見られるようになった。

小池委員長：天王川はもともと湧水が流れていてきれいなので、下水道の整備とは直接関係がないのでは。ただ、使うことで涸れてしまう危険はある。

3. 第1セッションの議論の報告と意見交換

関川・保倉川の印象と私たちの川づくり

■ 上中流グループ

議論の報告(発表:保坂委員)

1. 昔と今

- ・川で遊んだ。泳いだ(プール)
- ・河川敷でかぼちゃを作って食べた
- ・昭和45年まで中央橋に鮎がいた

2. 環境(生き物, 水量)

- ・蛇行もよかった
- ・矢代川は夏場に水が流れていない。
- ・頸城頭首工から魚があがらない。
- ・魚の種類が変わった。

3. 治山・治水

- ・山の荒廃をなくしたい。
- ・川の中に樹木が大きくなり、水の流れをじゃましている。
- ・川はまっすぐになり、一気に流れる。(7.11 水害後)。環境より治水重視。

4. 水質

- ・月岡あたりで排水が集中して関川に流れ出ている。(魚も臭う)→一時よりは良くなった。

5. 提案

- ・地域によって環境重点整備と治水重点整備にわけ
- ・農業用水として必要がなくても流れているのでは?(減反)→改善できるのでは?→話し合いの場がほしい。
- ・下流の浚渫より上流の土砂流出を止めるべき

私たちにできること

- ・一人ひとりの節水
- ・議論にして関心をもってもらおう。知らないことは罪?
- ・ごみ拾いからだんだんと
- ・山の保水力をつける

下流・上中流の役割

- ・ 棚田を離れるときは植林するか、水路を作る
- ・ 下流から草刈にきてほしい。

意見交換

小林委員：上流の流出を抑えないとどうなるのか。

Gさん：毎年10～15万立米の土砂が流出し、下流に流れて堆積する。河床上昇にもなるので下流の浚渫事業コストを上流に振り向けた方が経済的ではないかということである。上流はどうした、というよりは全体として考えるべきだと思う。

小池委員長：安塚のあたりは隆起した粘土層で、荒廃すると土砂が流出する。これは流域全体の問題である。もうひとつ、砂礫の供給が減って下流で不足しており、海岸浸食、生態の変化を招いている。それぞれの対応策が必要になる。これから、下流の発表があるが、見方の違いが明らかになると思う。



■ 下流グループ

議論の報告(発表:岡森委員、小林委員)

1. 昔と今

昔:水は怖いとは思っていなかった。

関川：澄んでいて、釣りを楽しんだ。小砂利、瀬、淵がはっきりしていた。

保倉川：洪水がでて住まいはつからず、洪水時に遊んだ経験（「馬だらい」）もある。

戸野目川：色はコーヒー色でも水遊び場（泳いだ後は乾いた泥をはたいて帰った。）

直江津港の鯉の風景

堤外に民地があり、住民との接点があった。

昔は波打ち際まで広い砂浜があった。

今:川に近づく気がしない。

関川：濁っており、泥の河床となった。釣りに行く気もしない。

保倉川：水害の常襲地域

戸野目川：色はコーヒー色で汚く、草の背丈も高くて、近づけない。

河川改修後は開けた感じだけど面白みがなくなった。

水質：下水処理水で汚れは取れるが、微量化学物質（環境ホルモン）の問題が気になる。

無理な都市開発が内水問題を引き起こす可能性がある。

2. 好きなところ良いところ

川を含んだ風景（田んぼや橋を含む）

橋のイメージが良くなった（波をイメージした欄干など）

プレジャーボート対策がされた

3. 困った問題

大雨時、天王川があふれる。

土砂の堆積があり浚渫が必要（昔は小砂利があり川遊びできたが、今はヘドロ状でやっかいものになっている。昔は砂利船が出るほど有益だった）。

ゴミ問題、上中流からのゴミ投棄も併せて考える必要がある。

祇園祭のみこし川下り（直江津の一大イベント）が土砂堆積のため中止になった。

治水問題が解決しないことには環境問題までいけないのではないかと？

4. 下流から上流への要望(一緒にやること)

海岸線の侵食防止、小砂利、瀬一淵の復活を目指して、土砂の適度な供給が必要。

水を汚さず、一定量以上の水を流してほしい。

無理な土地利用、過度な河川改修をやると一気に下流に水がでる。

棚田、森林を上下流一体となって保全しよう。

祇園祭が開催できる関川（適度な水量と河床）を上下流一体で作っていきたい。

遊水池の利用

意見交換

小池委員長：祇園祭は、1つの川づくりのきっかけになる。棚田・森林の保全も大きなテーマである。



4. グループ討議:第2セッション ー 議論ー

■ 洪水対策グループ

□ メンバー

Aさん	: 妙高市小石川(旧新井市)	
Dさん	: 妙高市杉野沢(旧妙高高原町)	
Gさん	: 上越市安塚区小黒	
Iさん	: 上越市港町	
Jさん	: 上越市西本町3丁目	
Kさん	: 上越市西本町3丁目	
Mさん	: 上越市春日新田	
梅澤委員	: 上越市三和区錦	
岡森委員	: 上越市下源入	
保坂委員	: 上越市三田	ファシリテーター
小池委員長	: 東京大学	オブザーバー

保坂委員:あと1時間半、よろしくお願いします。まず、問題点を挙げていきたい。

岡森委員：防災に携わる一人として、現在の関川の姿が気になる。大変な土砂の堆積。7.11 激特事業以降、顕著になっている。計画的流量は求められているが、今の形で集中豪雨時に海まで流せるか不安がある。川の中ほどで釣りをする人もいるくらい浅くなっている。内水害にも関係していると思う。行政としての対策が知りたい。

Gさん：上流域だが、昔は川の水はきれいだった。きれいな川の水に戻したいという気もあった。堆砂はここ30年、高度経済成長以後のことである。それまでは山の頂上まで開墾されて田があった。それがだんだん減少し、荒廃してきた。昔は川に大きな石があった。昭和50年ごろから石の間に土砂が詰まり魚がいなくなっていく。下流への流出もその頃かと思う。7.11以後、10万立米以上の地すべりが何度も発生し、防災工事をしているが、毎年何万立米も流出している。これを下流の人は知っているのだろうか。国も人や人家のことは考えるが、田や森には手が回らず放置せざるを得ない状況だ。これから、農業法人の立ち上げなどして農地を守りたい。川は1本であり、下流は河川事業、上流は砂防事業という分け方をしているとはいけない。一体的に考えるべきである。

Jさん：土砂堆積の状況が実際どうなのかを知りたい。祇園祭も土砂堆積で中止になったが、年々増えているのだろうか。40年前、関川の大改修があり、その時に100年に1度の大雨に対応できると聞いた。堆積が進んだ状況では対応できないのではな

いか。

梅澤委員：平成6年にいかだ下りを行い、稲田から出発したが、いかにらしいのは一部のみだった。7.11後、堆積が進んだため歩いて渡れる。(千鳥の足がつく)。堆積物は腐葉土が多く、船を出すとスクリューに引っ掛かる。直江津の海はずっとそんな感じで、20km沖も水深100mほどの遠浅である。

保坂委員:土砂堆積に関する問題点が出ましたが、ほかにどうでしょうか。

梅澤委員：減反とかもあって水の管理が高度化し、不要分は水を出してしまう。その分も雨になると一気に出てくる。100年に1回というが、流域全体で考えていかないといけない。

保坂委員：田んぼが遊水池の機能を果たしていないということですが。

Iさん：山林管理者が高齢化でいない。それが一番の問題。下流は住民が増え、管理された田んぼが遊水池にならない、とはいっても、山も管理する人がいないという状況で、むずかしい問題だと思う。

保坂委員:なぜ、そういった状況になったのか、に移りたい。

梅澤委員：気象の問題もある。集中的に一気に降ることが、ここ10年くらいで増えている。このあたりも考えていかないといけない。

Gさん : 安塚で 20mm/h 降ると、浦川原の河川は 2 時間後に上昇し、上越下流では 4～5 時間で上昇すると思う。経験的に見て、30mm/h では、下流は警戒態勢に入らないといけないと思う。

梅澤委員 : 関川の水の増え方はじわ〜とした感じだが、保倉川は怖い。一気に、上流から材木なども交えてくる。満潮などの関係もあるのではないかな。

岡森さん : Gさんがお話されたように、今は、30mm/h で非常招集をかける。昔は余裕があり、それぞれの団が見回ってから非常招集となったが、今はあつという間に出水するので、招集もいきなりである。

Gさん : 昔は水田だったが、今は乾田のため、雨が降ると水を切っていたために、一気に下流に水が行く。

Mさん : 春日新田に住んでいるが、保倉川、戸野目川、上流はみな宅地化された。今は保水機能がない。一度、誰かが宅地造成しようとしたら調整池を造るようにいわれた。住民は神経質になっている。土砂が堆積してから戸野目川に「かつぼ」が増えた。大雨で洪水を招くからと、その除去が行政に要求された。重機が入らず、県も困っている。

小池委員長 : 宅地化が洪水を引き起こすと春日新田の皆さんは考えているのでしょうか。

Mさん : 大体そうです。

梅澤委員 : 川の工事を上流からやっているのも問題だ。

小池委員長 : そんなことはないはずだが。

Gさん : 上流は河川工事ではなく、砂防工事としてやっている。

Aさん : その通り。管轄が異なるため、一体的に行われていない。河川により取扱いが異なるのが現状である。

Mさん : 7.11 激特事業で、堤防が高くなった。樋門を閉じてしまうので内水被害になる。まだ経験はないが皆そう思っている。

Iさん : ポンプでやるしかない。堤防をいくら整備しても内水害の問題が残る。

梅澤委員 : 工区、予算の関係もあるようだが

Gさん : 縦断をとって、あとはそれぞれ必要な断面積を確保できるようにやればよいのではないかなと思う。

保坂委員 : 下流では内水の問題がでてきました。そろそろ次の、「これまでの状況を見直しながらどのようにすればよいか」についてお話いただきたい。

Aさん : 一番大切なのは、集中豪雨への対策である。温暖化の中で確実に起こるそれへの対策。今までの降雨確率に頼ってはいけなない。

保坂委員 : 計画降水量ではだめだということですね。

Jさん : 大洪水の時、各部署が連携した、いち早い対策が重要だ。先日、7月に天王川があふれた。堰を閉めるタイミングが悪かった。関川の水が逆流した。せつかく堰があっても生かせない。

小池委員長 : 行政は本川と支川の洪水のタイミングを見ながら樋門の管理をするが、その

瑕疵について参考人に呼ばれることがある。本川の水位が上がっていると、どうしようもない。行政はきちんと説明することが重要である。

Dさん：直接被害がないので発言を控えていた。100mm/hという河川の問題とも言い切れない。自分でなんとかすることも考えなくてはいけない。7.11の時は、山から水が出るのがそれまでとずいぶん違って早かった。山が荒れている、開発で水はけの良い施設をたくさん造った、といった要因があると思うが、山から水が出ないようにすることが大切ではないか。矢代川も昔は大雨が降った時、あんなに濁った水にならなかった気がする。昔より土砂が流れやすくなっている気がする。ダムの上に川が2つあるが、その1つは川の両側の木を切ったことで、根元が抉られ、木が倒れ、さらに川幅が広がるということがおこっている。

小池委員長：集中豪雨対策。急激に降る雨に対してできることはないでしょうか。

Aさん：合流地点で本流に水を出せるような形、ポンプアップでも何でも、支川の排水が重要である。

Iさん：100mm/h規模の雨がだんだん増えてきた。行政は関川の流量をどのように考えているのか。たしか3700だったと思うが、これでよいのか。保倉川は1900だったか。そして、降雨確率は関川が1/30で保倉川が1/8だったと思う。さらに内水の問題もある。土砂堆積もあるが実際に大丈夫か。きちんと公表すべきである。

小池委員長：集中豪雨に対しては、確かに考えなくてはならない。ポンプの排水能力の問題もある。本川がはけなくては仕方がないが。計画流量を算定する時、森林の状況、過去の水害例などからモデルを設定し検証して決めていく。これが現在の計画論で、ここ数年は変わらないだろう。109水系の基本的な計画を策定したあと、これについて取り組むはずである。基本的計画はこうだからといっても、財政的に厳しく金はない。公共事業がこういう中で、どうするかである。バラ色の絵を描いても実際にできないのではしょうがない。

Aさん：中流でも問題がある。この10年、基盤整備は進んだが、都市排水と農業用水が分離されているため、水害対策の効果が限定されている。国土交通省と農水省がきちんと話し合ってやっていけば、水田に相当の水を貯められるはずである。

小池委員長：大変良い指摘である。まさに面で捉えるということである。その前に、農民と都市住民が話し合うことが必要である。法的には農地の多面的な機能というものがあ、できることになっている。

Aさん：そこでは、リーダーシップをとる人が必要である。それは行政なのか、あるいはこうした場なのかもしれない。

Kさん：面ということでは、最近のテレビ番組でアフガニスタンでNGOの医師が砂漠を農耕地に変えたという話があったのだが、新堀川を活用して大水の時に保倉川の水を海に流せないものかと思う。距離は4kmほどである。

小池委員長：放水路の効果は確実にある。しかし、ダムができれば洪水がなくなるかというところはならないのと同じで、必要条件にはなるが十分条件にはならない。戸野目川上流などの遊水効果を上げる方が重要かもしれない。根本的に解決しようとする施設を造るだけでは無理だと思う。地域防災力というか、地元の住民で

も考えていただきたい。

Kさん：先日の見学会の時、遊水池をふだんは空っぽにしておいて洪水時にめいっぱい使えるようにしたらと思った。

小池委員長：ある種、管理上の水が必要ではある。

梅澤委員：草刈の方が大変だったりする。

保坂委員：最後に、私たちにできること、をご発言いただいて終わりにしたい。

Iさん：(田んぼで水を貯めるという)先ほどの話は可能だろうか。

Aさん：稲刈り前とかは無理だろうが、時期によっては可能だと思う。

Iさん：山間地の問題など、みんなが知ることが大切だ。時には頭を下げてお願いすることも必要だろう。金もないし、山のほうも大切である。大島の方でも、タダでもいから農地を使ってくれといってもやり手がいないという。

Kさん：遊水池管理としては、ゴルフの練習場とか、カラにして芝生にするとか方法はあると思うのだが。あれでどれだけ貯えられるか心もとない。

小池委員長：そういう例はある。鶴見川というところで見られる。しかし、それだけの投資に見合う効果が必要である。

保坂委員：自分たち、自治会としてできること、まわりをお願いしたいこと、はどうでしょうか。

Jさん：財政問題もあるが、住民が楽しめる場、イベントも重要である。イベントを使って強調して欲しい。イベントにかこつけて、堆積している土砂を取り除く、ということもあるのではないか。

小池委員長：イベントをきちんと位置づけて、それがいろいろなことに波及することになる、そしてそれをみんなが知ること、環境への意識向上、防災力を高めることになっていく。

保坂委員：神輿の川下りが復活したのは大きく評価されている。

梅澤委員：利水という点では堰は重要だが、イベントという点では邪魔者である。

保坂委員：第2セッション、洪水グループはこれで終了とします。

梅澤委員：海とのつきあい、についても触れたい。

小池委員長：堆積の状況を調べるのが大切だ。現状はどうなのだろうか。

石田課長：現地を眺め、空中から見る限り、今は河口閉塞は認められない。

小池委員長：これを調べ、住民に知らせることが大切である。

■ 環境グループ

□ メンバー

Bさん	:上越市板倉区針 … 途中参加	
Cさん	:上越市本町	
Eさん	:妙高市高柳(旧新井市)	
E ⁺ さん	:妙高市高柳(旧新井市)	小学4年生
Fさん	:上越市子安新田	
Hさん	:上越市塩屋新田	
Lさん	:上越市三田	
Nさん	:上越市春日新田	
小林委員	:上越市三田	ファシリテーター
横田委員	:上越市下馬場	
三阪氏	:東京大学	オブザーバー

**小林委員：問題点の洗い出しと重要度、ということで、資料1の一覧表、見学会の記録を参考に、
全般的なご意見をいただきたい。**

Fさん：排水処理場の排水口が、島田の上流、広島～十ヶ字頭首工の短い区間に固まって4カ所もある（松下、日曹、新井の下水、上越市の下水）。これを分散させないことには、渇水期には排水が薄められないので、臭気もあるし、魚に影響する。臭気に関する数値の規制はないが、濁りはなくても臭いは出る。7.11 水害の後に排水口がこの場所に集約された。

Nさん：水質と景観。水質は、午前中に話したような微量な化学物質の影響が気になる。景観については、国交省でもだいぶ色々されていて良いと思うが、関東と比べると、全体的に河川敷の整備がされていないと思う。生活との密着度の差、違いを感じる。生活ごみをわざわざ川に捨てにくる人がいる。河川敷の管理は難しい。戸野目川の堤防上は散歩コースとなっているが、犬のフンが多く、うかうか歩けない。市民に管理させるのも無理がある。

三阪氏：河川敷の整備については、関東の川と違ってそもそも関川は高水敷自体が狭いせいもあるのではないか。

Fさん：管理を誰がするかというのは大きな問題だ。市民に根づかせるには、どういう形で住民意識を持たせるかを考える必要がある。

Hさん：自然を守ることと、ところどころにベンチなどを設置することが必要だと思う。行政に対し意見すると、よく対応してくれている。住民意識をもたせるためには、民度を高めルールをつくることと、教育が大切だ。

Lさん：大学で教わったとおりの下水処理がされていれば、川はあまり汚れないと思う。実際そんなに汚れているのか？

横田委員：大学ではそのように教えるだろうが、上越では下水処理の普及率は50%ほど。法律はクリアしているが、人によって充分だと感じる基準の違いがあり、高いレベルを求めようとする、市で普通の枠以上にお金をかけるか、規制を厳しくするということになる。各家庭、工場から排出するときに、害のあるものを出さないようにするのが一番の方法。水質は徐々によくなってきているが、毎日化学物質が増えているのも事実。規制対象には、環境ホルモンなどは入っていない。モラルを上げることも必要。

Hさん：環境ISOをとっている上越市は、もっと力を入れるべきだ。

Fさん：よりよい処理施設にするためにはコストがかかるので、コスト面からは、環境優先でいいのか、という問題もある。治水よりも環境をとるとのことならいいのだが。条例で規制を厳しくすると、企業が上越を離れていく恐れがある。せっぱつまった状況にならないとやらないのが現実だ。本当は、すでにせっぱつまった状況にきているはずなのだが。

横田委員：工業排水より、むしろ生活排水の方が問題だ。

Lさん：埋没林の調査で関川に入ったが、透明度が高くてきれいだった。こんなにきれいだとは知らなかった。イベントがあれば親しみがもてるのではないかと思う。

私が子どもの頃は、川でのイベントがなかった。埋没林は、紀元前 4000 年頃のも
のだそうだ。

小林委員：高土町の埋没林は、川底が洗われて出てきたもので、粘土層があったために残
ったものである。木はハンノキ、タモノキなど。魚津には海底埋没林があり、こ
れは水が冷たいので腐らずに残っている。

Cさん：儀明川は、上流には水があるが本町のあたりはほとんどない。しかし、7.11 の
時は西側（仲町側）に水があがったことがある。昔は儀明川が雪捨て場になって
いたが、水が少なく流れないと雪が溶けず、そのために部分的にあふれたりする
ため、雪捨ては今は関川に行っている。

発言者不明：青田川の下水道整備率は？

Cさん：本町は平成 18 年に整備済み。大町 3・4 丁目も終わった。

Fさん：青田川はヘドロが少なくなった。

Cさん：川幅を狭くして整備している。

小林委員：水質はあまりよくない。

横田委員：どうしても、市街地と山間地（農業集落排水）の間がいちばん下水道整備が遅
くなる。上越市の下水道整備率は 30% くらい。直江津では、下水道は通っていて
もつなぎこみをしていない家も多い。

Eさん：関川の中流域、月岡防災公園の少し上に住んでいる。川から近いので、よく子
どもを連れていくが、水はきれい。子どもと川のゴミ拾いに行ったら、ゴミがほ
とんどなかった。いいことだが、裏を返せば川に人が来ていない、使われていな
いということだと思う。自分の世代は、「川で遊ぶな」と言われた世代で、川に近
くても行かない、整備されていても行かない人が多い。月岡の防災公園に行って、
整備はされているが安全に川原に下りられるところがなく、親水性がないと感じ
た。川との接点を作っていないと、モラルや関心は向上しない。川に関心を持
つのは水害の時だけ、というのはさびしい。小さい頃から川に遊びに行っていれ
ば、大きくなってからも行くと思うし、そうならないと、関心やモラルが高まら
ない。

小林委員：月岡のあたりはゴミが多かった。昔、自分の住んでいた集落では、隣同士ちょ
っと境を越えてお隣さんの敷地まで掃除していたものだ。そういうふうにしてい
れば、モラルの問題は起こらないと思うのだが…。

Nさん：町内に外国人が住んでいるが、中国の人のゴミに対する意識は、われわれとは
かなり差があるようだ。ゴミを分別することについてもそう。考え方が違う。

Fさん：野鳥の問題もある。野鳥の会の人たちが「河川敷の木や草を刈るな」と言うの
で、カワウが増えてきている。増えすぎてもよくないわけで、どういう形で維持
するのが適切なのか、考えていかなければならない。フン害の問題も出ている。

Eさん：関川の河川維持用水の必要量はどれくらいなのか。

事務局：平成 9 年に、維持用水を確保することが河川法で定められたが、その量につい
ては現在検討中である。

Nさん：赤倉の下水処理がされていないというような話を聞くが。

横田委員：下水処理はされているが、反対もあって進捗状況がよくないということである。

小林委員：これからの社会や技術の見通し、ということで、中・長期と短期に分けて考えるとどんなことがあげられるでしょうか。

Hさん：中・長期的にはやはり教育・モラルの向上だろう。短期的には、稲田の排水処理に取り組んでほしい。

Nさん：すぐにできることとして、川に何かを敷いたり、河川敷に何かを植えたりすることで水質が改善できないだろうか。

小林委員：望ましい川の姿についてはどうでしょうか。

Nさん：メリハリをつけた開発・整備。

Hさん：Jプランであげられている6つの市政項目の実現を。

Fさん：稲田橋から下流について、水量が変わらないなら、水の流れる幅を狭くして深みをつくってはどうか。ただ水を流すだけではダメだと思う。上中流については環境を重視し、自然型の整備を行って、蛇行させ瀬と淵をつくる。下流は治水を重視して、ある程度人工的になるのはやむを得ない。

Eさん：上流は7.11以降かなり整備されてきたと思う。

Fさん：深みがないため、大きい魚がいなくなった。生態系が変わった。

Lさん：下流ももう少し自然な形がいい。魚道は本当に機能しているのだろうか？調査で回っても評判が悪く、評価されていない。

Fさん：どんな魚もOKという共通の魚道はない。大きな魚は水が少ないと上れないし、小さな魚は水が多いと上れない。そのあたりは難しい。

横田委員：やはり川に行くこと、利用することが大事ではないか。

Eさん：子どもと親と一緒に川に行くことだろう。子どもに対して、いきなり「洗剤を使うな」「食べかすを流すな」と言っても、なんで？ということになるし、親も説明できない。知られていない公園をPRして、多くの人に足を運んでもらうことが必要ではないか。

三阪氏：どのようなPR方法がいいと思うか。

Eさん：小学校区、町内など身近なところからだと思う。

Fさん：イベントを行う際に、行政の支援がほしい。最近川の事故がないのは、人が川に行っていないということ。それから、魚の種類などを書いた下敷きを学校に配っているが、何も知らない1年生に配るのではなく、川の学習をする中学年に配布してほしい。

Bさん：板倉の田井で、船着場だったところにサクラやヤナギを植えて整備している。船着場がいくつあったのか、とか、そういうことを調べていけないかと思う。また、堤防の土手上が道路になっていて一般の人も使えれば、そこを車で走ることによって川が見え、関心が高まるのではないか。

小林委員：流域をもっと広く把握して、日常の心がけ、権利の調整などをしていかないと
いけない。水の循環を考えていかないと、本川だけでは解決しない。農地との関
わりもあり、農業セクションとの横のつながりも必要だ。

5. 第2セッションの議論の報告と意見交換

関川・保倉川の洪水対策と環境保全

■ 洪水対策グループ

議論の報告(発表:岡森委員、保坂委員)

(1) 問題点の洗い出しと重要度、背景

土砂の堆積問題

- 土砂の堆積問題：関川で7.11以来、土砂の堆積が進んでおり、計画流量が流せるのか。
- 昭和40年代より人口流出。山の上まで開墾しており、その頃は河床に礫が点在していたが、棚田が荒れて土砂で埋め尽くされるようになった。10万立方メートル規模の地すべりが発生しており、それが民家に影響があるときは行政の対応があるが、民家に影響がないときは放置され、その影響が下流に及ぶ。
- 砂防事業と河道管理計画の整合性が必要。
- 河川の土砂堆積状況の把握が必要
- 河口の堆積はほとんどが葉っぱの混ざった泥で、浅くなっている。

土地利用と水害

- 戸野目川では田んぼが宅地化、商用地化し、内水被害の危険性を増やしている。
- 「かつぼ」の密生が洪水の阻害となる。このことに住民が神経質になっている。
- 内水氾濫する場所に宅地が広がってきている。

農業管理の影響

- 農地の水管理の高度化により遊水機能が低下しているのではないかと。
- 上流では山林を管理する人が少なくなり、遊水機能が低下している。
- 時間30mmの降雨で消防団は非常召集。昔は消防団メンバーが巡回の余裕があったが、豪雨後水の出方が早いのでその余裕がなくなっている。

河川工事、管理の不整合

- 国一県管理、河川一砂防管理の行政区分の不整合により、危険性が解消しないもしくは増加する可能性がある。

気象の問題

- 一気に強く降る雨の量が多くなっている。

(2) これからの洪水対策、行政に期待すること、私たちにできること

- 集中豪雨対策が、今の河川計画では考えられていないのではないかと。
 - ・ 支川が本川に合流する部分にポンプ排水が大事
- 災害時の樋管、樋門などの施設管理と、その情報の住民へのその周知徹底
- 水田に水を効果的に貯めることも考えてどうか。農地・森林・都市の住民の話し合い・協力と、農林水産省・国土交通省の相談が必要。

- 街の人も行政に依頼するだけでなく、農村、山村の人々と相談しながら、対策を考えていく。
- 祇園祭というイベントを象徴とした川づくり、防災力を高めていきたい。



■ 環境対策グループ

議論の報告(発表:横田委員)

(1) 問題点の洗い出し

水・水量・水質

- 水質問題（環境ホルモン）
- 下水道の浄水は今の基準で充分か？
- 排水処理の排水口が集中している（臭気の問題も含め）
- 景観問題
- 河川水量の適量把握

ゴミ

- 生活ゴミを河川敷に捨てに来る
- ペットの排泄物処理
- 使っていていいもの、悪いものをアピールする

その他の問題点

- 河川の利用が少ない（遊ばない）
- 川へ安全におりられない（水量が多い）
- 野鳥を守る会との折り合い（河川敷の木を守り、野鳥が増えすぎると食物連鎖で魚の生態系に影響）
- 儀明川は夏季水量が少ない
- 冬季排雪利用

(2) 要望

- 短期改善：川への排水質改善
- 長期改善：教育・モラルの向上
- 河川敷にベンチ、環境教育用休憩所など整備して欲しい
- 中・上流は治水も大切だが環境面への配慮・自然型の川づくり（蛇行）
- 下流ももう少し自然に近い状態に（使える魚道の整備も）
- 堤防を道路として使い、川を見る機会を増やす
- 稲田橋より下流は、神輿の川下りができるよう川の中央を深くしては
- 行政と協力・協賛するしくみ（イベント等）
- 船着場の整備（板倉区）サクラ・ヤナギの木を河川に近いところで植樹（オーナー制、個人名を入れる）
- Jプランの実現
- 埋没林の活用（財産）

(3) 自分たちができること

- 学校区単位で川と接する機会をつくる
- 川へ行く機会を増やす（→川への関心・意識が高まる）

- マナーの徹底
- 住民意識の向上のためのルールづくり
- 川原のゴミ拾い



6. 全体のとりまとめ

小池委員長：午前、午後のセッションを振り返ってみます。

- ・ 上下流域で共通だったのは、集団で川で遊んだ、ということ。
- ・ 河川敷内でカボチャを作ったなど、民地があったというのは、それがあって人が川に近づく機会となったわけで、管理形態の変化という意外な視点をいただいた。
- ・ 昔は、汚い川＝濁った川という認識はなかった。このことを思い出して欲しい。今の見方は、コーヒー色だと行きたくない、となる。
- ・ また、共通の話題に「棚田・山林の保全」があった。これについては、アンケートでも場所に関係なく高い数値を示した。考えていくことが大切である。
- ・ 「土砂」も大きな話題になった。泥と砂礫の違い、砂礫が減って泥が増えたこと、海岸線が狭まっていることなど。
- ・ 下流、洪水、環境、いずれのテーマでも出たのが「神輿の川下り」というイベント。これが安定的に、継続的に開催できることが大切である。ここには水量、環境、土砂、水質、いろんな要素が含まれている。
- ・ 自分だけでできるものではないが、土地利用の改変など面的に捉える必要がある。
(戸野目川沿いの宅地化、棚田、農地の水管理の合理化)
- ・ 点→線→面へ。そのためには、流域住民が相互に話し合わなくてはいけない。また、行政も縦割りの壁を崩し、横の連携をとる必要がある。さらに、長期的に教育を進めていくことが大切である。
- ・ 都市の人は農山村の人と協力、一緒に考えていくことが必要である。上下流で洪水の被害低減を一緒に考える。そのためには、川に行く機会を増やす、それによって川を総合的に考える目を養うことが不可欠だが、自然に機会が増えるわけではないので、誰かが機会を増やす工夫をしていかななくてはならない。それも、目の前の川だけではなく、いろいろなところを見る機会が必要である。
- ・ イベントの活用が鍵となる。

小池委員長：散会する前に一言ずつお願いします。

Eさん : 午前中は上中流、午後は環境のグループに入りました。子供はついてきただけですが。昔いなかった魚がまた見られるようになった、というのが、ただ増えればいいというものではない、ということがわかったのはひとつの発見でした。子供を川に連れて行くことをこれからも続けていきたい、自分にできるのは、節水もそうだが、親として子どもに教えていくことかな、と思います。

Hさん : つなげる、多様性、ということから、高田平野に2つの河川があり、行政と防災局で話し合っただけのマップを作り、市民に配って欲しい。

Bさん : 午後からいかなかったが、これだけをとるとなると防災になるが、問題は用水路

と一緒に考えていかないといけない。そうしながら地域とどういうふうにつきあ
っていかを考えていきたい。これから何かあったらまた参加したい。

Aさん : 夢は、下流の港から上流までみんなが川に親しめるようになればと思う。よそ
では実際に使えるところもあるので、安全対策等クリアして堤防上の活用、河川
敷の活用を実現して欲しい。

Nさん : 環境について参加した。排水など、出口よりも入口の段階で考えなくてはいけ
ない、というのにその通りだと思った。教育の問題とか、子供の頃からやってい
かないといけないと思った。私たちも気をつけてやっていかないと。

Mさん : 町内会の役員をしており、関心はある。これまでも委員会の会合に何度か出て
いるが、これだけの資料を住民にどう伝えていくか(関心の問題だが)、だと思ふ。

Gさん : 非常に参考になる意見が多かった。下流の方とお話させていただいて、常々きれ
いな川には人々は惹きつけられ心を育まれる、下流に土砂を流して申し訳ないと思
っている。川から離れていけば関係ないというのではない。あふれば自分たちの
ところにとどまるわけだし。行政としても取り組んでいけるように、考える場を作
っていききたいし、これからも考えていきたい。

Jさん : 子供の頃の思い出がもうひとつ。北陸線の鉄橋から労災病院の間に河川敷があ
るが、私も借りて畑をしていたことがあり、涼しい風にあたっていた。今は川に
行く機会が少ないなあ、と思った。もっと親しめるように、ベンチや木陰の設置
でいこいの場が増えるのでは。

Kさん : 子供の頃からの思い出がたくさんある。九州の天草で生まれ育ち、4月から10月
まで裸で山から川、海に出て、「はじめ人間ぎゃーとらず」のような生活をしてい
た。妙高山は日本一美しい山と思うようになった。その妙高山から流れてくる関
川はなんと美しい川か、と退職を期にデジカメを片手に歩き回っている。こうい
う美しい自然に育まれる子どもたちに、大人の知恵と愛をもって、川のこわさ、
問題を克服することなどを伝えていきたい。いい勉強をさせてもらった。ありが
とう。

Iさん : 今日のワークショップの乗はずばらしい。5時間半かけないとこれだけのこと
はできない。行政に頼んでもすべて解決しないことを感じました。自分に何がで
きるのか、自分たちのまちは自分たちで何とかするんだ、という思いで、住民自
らが考えなくてはいけないことをつくづく感じました。

Dさん : 上流で直接は関係ないが、毎日直江津まで通勤しているが、下流域にこんなに
たくさん問題があるのか、ということを知った。矢代川のこともあるが、
まず、川はこうあるべきだということから議論を進め、それに向けてどうする
か、という進め方をしていくべきだと思う。

Fさん : 行政にお願いがある。渇水期の水量については、短期的に解決できる問題では
ないと思われるので、私の関心は少しずれているかもしれないが、お話をしてく
ださい。光ヶ丘牧場を上越市と板倉区が管理することになったが、牧場としては
すでに牛もいない。これを保水林としてうまく活用できないか。今の時期に行政
が何かしないと、民間に好き勝手されてしまう。自然を自然な形で使う方法を考

えたらどうか。行政が夏の間だけ運営しても採算がとれないと思うし、これによりだいたい洪水期の水が確保されるのではないか。我々も協力し、ブナ1本でもモミジ1本でも植えたいと思う。

Lさん：最近の若いものはゴミを捨てると言われて寂しかった。友人と川原でバーベキューや花火をすることがあるが、みんなに注意していきたい。

小池委員長:委員の皆さんも一言。

岡森委員：今日は、情報という論点が欠けていたので一言。今までも警戒水位は発表されていたが、水防法の改正により、特別警戒水位というのが設定され、インターネットで公表されている。問題もある。警報が出ると広報車を巡回させているが、大雨で窓を閉めているので聞こえないと言われる。中小河川は短くて急なところもある。一気に水が出る分、時間の予測が難しく樋門の開閉に苦慮している。最近ではテレビやラジオ、携帯で入手できるし、場所により防災無線でもやっているの、耳を傾けて欲しい。

横田委員：これからも委員会のご活動にご参加いただきたい。

保坂委員：皆さんの高い見地からのご意見に支えられて、中身の濃いワークショップができたと思う。これからも続けていくことで、すばらしいくびき野流域の姿が見えてくる気がする。

小林委員：みなさんの一言一言に感銘を受けた。私自身、あまり行動していないが、日ごろできるだけ関川に行こうと思っている。今後ともよろしく願います。

小池委員長:つながり、多様性、線から面へ、住民が主体となるまちづくり、これらをまとめて骨太の方針となる「水の基本的な考え方」を委員会でまとめ、フォーラムを開催したいと思います。